

2015年2月7日(土)

場 所 アイヌ文化交流センター  
時 間 13時00分～  
聞き取り者 K. H

聞き手：まずは、石狩アイヌとあなた自身についてお聞きします。自己紹介からお願いします。

K. H：はい、私は旭川市近文生まれ旧姓・Hです。〇〇歳(50歳代前半)です。K(K. Hの姓)っていうのは、私の母が結婚してそこに養女に入って、そのためにKになりました。旭川ではアイヌ墓地には「H(姓)」っていうのは、何人かのご先祖さまが入っているんです。大フチ(曾祖母)——私のフチ(祖母)のまたさらにフチがエカシ(長老)なんですけど、「A. N」なんです。…で、なんでかA. Nは十勝生まれなんです。A. I1(祖母)が泥川(ワッカウエンペツ)生まれ…今で言う新十津川。A. Nのお母さんがA. I2です。父は不明です。(戸籍に)名前が載っていません。O. Yっていうのが、A. NとA. I1の娘なんです。3人姉妹で、長女がA. T、二女がA. Y(後にO. Y)、三女がA. K。私のフチが、今はO(姓)を名乗っているんですけど、その前はU. Yになって離婚してO. Iさんと結婚したんですけども…H. Iっていう人とも…内縁の妻。だから、一つの家には旦那さんが2人いたの(O. IとH. I)。でも、H. Iとは籍を入れずに…亡くなった時も「O. Y」として亡くなっているんです。

ちょっと変わった話なんですけど、長女のA. Tと三女のA. Kが「呪術」を持っていて、一週間「レイブン(猛吹雪)」を止める役目と、それから一週間しばれる…それを解く役目をしていたのがA. TばあさんとA. Kばあさんだったんですよ。名前は出せないんですけど、もう一人「呪術」をもっている人がいるんです。私も呪術ができますが、やりません。よっぽどのことが無いとやりません。

聞き手：これを教えてくれたのは誰ですか？

K. H：O. Yです。

聞き手：O. Yさんと一緒に暮らしていたのは、いつごろのことですか？

K. H : 私が小さいころ、母がアイヌのことが大っ嫌いで…すごいピリカメノコ (美しい女性) なんですよ。だけど…私を産んで、姉やフチに預けたんですね。だから、私はフチの懐で育った感じなんですよね、だから唄や踊りがフチから伝承されたものを覚えたんです。旭川で農家をやっていたんですよ。本家は農家で。フチ (O. Yさんは) よく (どぶろくを) 飲んでましたよ。どこに隠しても飲んでました。ビックリするんだけど、丸一か月、朝から晩まで飲んでました。24時間、31日間。そして、2か月間まったく飲まなくて—お粥とか食べてたの。その繰り返し、酔っぱらって酔っぱらって。そして旭川の近文 (チカップニ) …チカップニ・ウプン (雨粉) がアイヌ語で、レイプンは猛吹雪。タスクルがしばれる…ということの魔術・呪術をやっていたのがA. TばあちゃんとA. Kばあちゃん。(吹雪が) 本当に止まるって言っていた。これからしばれるとか吹雪の予測もしてたみたい…ってO. Yばあちゃんから聞いた。そういうのをする人のことを「ト° スクル」というの。「ト° ス」するというのは、近い将来がわかる…予言みたいなこと。でもある年齢になると「ト° ス」できなくなる。でも、ある年齢になると、また「ト° ス」できるようになる。そして、もうひとつ「イム」っていうのがあるんだけど、私も、「イム」するんだけど…いきなり何か、「ポン!!」としゃべられたら…「あっちちち!!」って、ちょっと変わった行動をしたり不思議な声をあげたりするのが「イム」って言うんだけど、「イム」を治すのは…30代までに治せばイムは止まるって言われたんですけど、私、治らなかったの。未だに「イム」してる。パニック症候群みたいな。例えば、阿寒のばあちゃん(H. K)。あそこのコタン (集落) 斜めでしょ。上からバケツ持って、水汲みに行った時に、若者が山の中腹あたりで「水を投げない! 投げない! 投げないっ!」…って言ったらびつくらこいて、水を「バーッ!」…っと投げちゃうの、それを、5~6回繰り返しやられたらしいって話を聞いたよ。言われたことの逆のことをしてしまうんだよね。それを若者が面白がってやってたの。それが「イム」だから。それで…何回も何回もかわいそうだよ。歌は上手だったけど。それを隠している女性もたくさんいると思うけど。メノコが全員ってわけではないけど。日本人の言うヒステリーとはちょっと違うんだけどね。「イム」してるときは、別に「イム」してるって意識してないけどね。

聞き手 : A. NさんとA. I1さんの話、聞かせてくれますか?

K. H : 写真はあるけど、会ったことは無いよ。和装してるんだけど、まるっきりエカシとフチだもん。オンネしてたけど (年をとっていたけど) …1900年代の初めころかな。

聞き手 : 会話にアイヌ語入ってきますね。

K. H : なんかしゃべっていると、思い出してくるの。私は…O. YとK. H2(母の姉)、K. H2さんの聞き取りもされてると思うけど、その人たちに育てられてるの。私は認知もしてもらってなくて、私生児なの。母は京都の舞妓さんをやってて、それから帰ってきたんだけど、新十津川(泥川。A. NとA. I1がそこで漁をやっていた)からどんどんどん日本人に追いやられて、居場所が旭川になったのね。旭川で長年暮らしてて、今度は上川で観光アイヌとしてポンモシリで働くことになったの。私が小学校の1年生から5年生くらいまで、一日2回踊りと歌をやってたの。ちょっとおこづかいもらってね。ポンモシリには温泉はないけど、クマ牧場とかチセ(家)もあったしね。そのチセの前で踊ったよ。そしてぐるりとポンモシリの周りにおみやげ屋さんがあった。今はもう上川の観光にアイヌの人は携わっていないけどね。その当時はO. Yさん、K. H2さん(叔母)、I. Fさん、Oさん…7人ぐらいで踊って、踊りのない時はフチたちはチセのなかで刺繍していたよ。私は苦手のできなかったけどね。小学校5年生くらいの時から中学2年生まで、舞妓をやってた親に内地に連れて行かれたの。神奈川。また上川に戻ってきて、唄と踊りをやったの。そしたら戻ってきた時に、上川で差別にあった。男子生徒が「あっアイヌがきた。くさい」「プールに入るな」「チャッピーヤッピーヤやれ」…そういうことやって、いっつも大げんかして殴り合いして、制服ぼろぼろ。でもうちの親は絶対負けるな、制服は買ってやるからって。

聞き手 : そのときは、お母さんも上川に戻ってきてたんですね。なにか心変わりあったのですか？

K. H : うーん、フチから呼ばれたのかもしれないけど。アイヌきらいだって言っていたのに、上川に何年かはいましたね。うちの母に彼氏ができて、神奈川に行ったのね。彼氏と別れたから上川に戻ったと思うんだよね。籍は入れてなかったけど。わたしが30歳くらいの時に、ようやくうちの母が結婚したの。定山溪にいたとき、K(K. Hの姓)さんという男性と結婚したの。そして母がK. Kで、父がK. Tでそのあいだに子どもがいないので私が養子に入ったの。私はHだったから。良くない話があって、Hの7代前のフチがすごく悪いことをしたの。名前は分からないんだけど、そのフチがエカシを殴り殺したの。殴り殺して「お前らHの一族は、7代先まで呪ってやる」って言い残して死んだの。わたしが7代目だからね、Kのお父さんが救ってくれたと思う。Hはみんないい死に方しないの。H. I1っていうおじいさんいたでしょ、いつもだったら同じ時間に出て行くのに、その日は1分遅れて家を出ただけで汽車にひかれて死んだの。だからO. Yは、手で肉片を拾ってアイヌ墓地に入れたの。脳みそも全部素手で拾って、トンバ(お標)を建てて土葬したの。トンバは、男

は四角で女は三角。まあ、でもその死に方は呪い…というかエカシの怨念だと思う。K. H2の娘が…いま富良野にK. K2…っていう人いるんだけど、その人にも私、育てられたの。彼女は小さいころ身体が弱くてね、A. Nからアイヌ名をもらってるの。S。身体が弱かったからね。今年〇歳（70歳台後半）。彼女は小さいころA. N（60歳代後半のときにK. K2さんに出会ったと推定できる）に会ったことあるんだね。

聞き手：旭川時代のフチのお話を聞かせてくれますか？

K. H：S. Kフチの家で、K. T2フチ、S. Kと私のフチと4人くらいでね、いつもウポポ（アイヌの民謡歌）してた。誰かが死んだら、その人の着てた衣服を少し破いて、米、ソーメンそれからブクサ（ギョウジャニンニク）、塩をぐちゃぐちゃに混ぜて、本人の好きだったものとか、線香（以前はヨモギだった）を家の北の方向に向かって、その死んだ人の両親ではなくて遠い曾祖父母の名前を呼ぶんだって。両親を呼んでしまうと、せつかく若いカムイ（神）、カムイモシリ（神の国）に上がったばかりなのに可哀想だからって。これが旭川のイアレ（葬式のような儀式）。私も〇のときにやったの覚えてる。

聞き手：旭川の唄…ってどんなのですか？

K. H：私はさ、小さい時からフチの懐にいたから、どの人がどんな唄の音頭の取り方かって分かってたんだ。小さいときは母親が水商売していたから、フチのところにも逃げた。フチって飲んべえでオンネしてたから（年をとっているから）、独特のにおいするんだけどすごく安心できた。S. Kばばの声は優しい声なの。うちのばば（O. Y）の声はきかない声なの。いまもCDとか持ってるんだけど、聞くとそのころを思い出すよ。S. KばばとかO. Yさんとかは日本語も話してたんだけど、夜になるとアイヌ語で話すし、単語単語でアイヌ語は出てきてた。「エークスコノ（突然に）言わないで」とかね。

聞き手：では、次にO. Iさんの話を聞いていいですか？

K. H：木彫りの上手なエカシだったみたいだよ。いつ亡くなったか分からないんだけどね、結核で亡くなったの。穏やかな人で、フチがいくら飲んでベロベロになっても怒ることなかったって。ずっと木彫ってたよ、クマとかニポポ像（小さな木の子ども像）とか。どうやって売ってたかは知らないし、会ったこともないけどね。一つの屋根の下にO. Yさんは男を2人入れていたんだよ。考えられる？O. YはH（姓）が好きじゃなかったんだけど、H（姓）はY（名）と離れなかったの。Y（名）は

H（姓）がお酒を飲むと暴力ふるわれていて、だから崖のところまで行って止めさしをして死んだように見せたんだって。…したら酔いが醒めたH（姓）が「O. Y～、O. Y～死なないでくれ～」…って崖に向かって言うから木から降りて「この腐ったイヤンペー！俺（O. Y）の有り難さがわかったか」…って殴りかかったんだって。でも、O. Yさんが最終的に籍を入れたのはO. Iだから、心を許したのはO. Iなんだろうね。

聞き手：旭川の家には、アイヌの道具たくさんありました？

K. H：あったよ。サパンペ（男性の冠）もあったし、毛皮があったし。O. Yの息子で一番かわいがられたY2（名）…っていたんだけど、木ネズミとかウサギを獲る猟師だったの。だから私は木ネズミとか…特にウサギの脳みそが大好きだったの。もうホヤホヤであったかいんだもん。生で。その後、肝臓も食べる。甘くて美味しいよ。死ぬ前にもう一回食べたい。野ウサギと飼うウサギの味は全く違うからね。飼うウサギは小学校1年生の時飼ってんだけど…「みーちゃん」っていうんだけどね、学校から帰ってきたらいなくて…その夜ウサギ鍋だったから。さすがに脳みそとかは食べられなかった。

聞き手：今も野ウサギ、食べられますか？

K. H：今のハンターって、シサム（和人）でしょう。私が声を大にして言いたいのは、アイヌを猟友会に入れてくれってこと。例えば、ヒグマをとっても送ることもしない、儀式もしない。だから私聞いてみたの、阿寒のD（名）さんに。キムンカムイ（山の神、クマ）はさ、ただ殺されてカムイモシリにも行けなくてね、和人が獲ってきたのを、なんとかアイヌが一度送ってあげることはどうなのって。そしたらね、悪いシャモ（和人）が悪い気持ちで獲ったら、それがアイヌにかかってくるからだめだって。逆に儀式をするとね。だからやらないって。猟友会に必ず2名くらいはアイヌを入れて、どうしようもなくキムンカムイを撃たなきゃダメな時はね、撃ってもらおうと。そしたら天上の国に返してあげることもできるし。

あとはね、札幌にアイヌ専用の土地が欲しい。札幌はあちこちから来てる人多いけれど、〇〇ちゃん（聴き手）みたいに札幌で生まれ育った人もいるわけだ。そこにね、札幌にアイヌ墓地を作ってほしいわけ。アイヌの死生観も含めてアイヌ文化なんだから。有り難いことに、旭川には「旭川アイヌ墓地」…ってあるからね。ただし最近シサムが入ってきてる。「これ誰？」…って聞いても分からないって。両親にはお墓は作ってあげたいけど、そんな安いものじゃないからね。O. Yは上川に眠っているし。無縁になるのも嫌だからね。阿寒でも、帯広でもアイヌの土地ってない

からやっぱり、寄り合わせで墓地を作ってほしい。

…あとね、思い出した。私がO. Yに言われていたのは、「お前は比布という町のカンナカムイ（雷神）の子孫だ」…ってこと。うちのルーツを調べてみると。だから雷様が鳴ったら寝てちゃダメだって。線香がなかったらよもぎ、よもぎもなかったら衣服を燃やして「ラチタラ アプニタラ（おだやかに おごそかに）」と言って頭の上を通らせるんだって。

…あと入れ墨入れるのもね、ニシパ（お金持ち）のところの嫁じゃないとできなかつたんだよ。ようするに熱をもつからね。切れないカミソリ、チッチッってやって、鍋の底の炭を入れていくの。正常なところに傷をつけていくわけだから、熱くなるの。だから洗い物とかできなくなるの。それでも大丈夫なくらい人数がいる、寝てもいいよってこと。だから手も足も入っている人なんてお金持ちな人だったんだよ。

聞き手：石狩アイヌの遺跡を巡ったことはありますか？

K. H：ないです。ルーツを辿ったことはあるけどね。旭川とか上川。そうだA. Iのお父さん、I. Kアイヌ、お母さんはK2。あの昔の男の人は「アイヌ」ってつけるの。コシャマインとかシャクシャインもね、コシャマアイヌとかシャクシャアイヌだから。この人が住んでいたところ…泥川も見て回ったよ。車で。

聞き手：現在に受け継がれるアイヌの伝統文化に関わることについて、お聞きします。

K. H：やっぱり、私はアイヌの料理とか刺繍とかできないから、唄とか踊りですね。だいたい20年くらい〇〇（団体）に入ってるし。血が騒ぐから。持って生まれたものだと思うし、やっぱりフチたちのおかげでやりたいと思った。あんなに楽しそうにやっていたんだから、やらないわけないでしょう。どぶろく飲んで、シントコ（行器）はなかったけどね。テーブルとか叩いて「ムイソ〜カ ハネネ ポップ ホイヤ…」そのあとにいろんなの続いていくんだけどね、言い間違った人は寝てなきやダメなんだ。このゲーム、わたしはアイヌ語でできなかったけど楽しそうだった。フチは負けん気強いから、音頭取りはいつもフチなんだけどいつも間違えて「オイヤ（まったく）キモ焼けた」…って。いつも楽しそうに、自分でお酒つくってさ…みんなトノト（酒）造ってくるからね。どこのトノトがおいしいとか、あいつがつくったトノトはまずいとか。日本酒とかも飲んでたけどね、K. H2が一升瓶を隠しておいたんだって。そしたらある時に、料理作ろうと思って見てみたら蓋が開いていて、中身は水。全部フチが飲んじゃったの。でも、なんせどぶろくが一番好きだったみたいだよ。ビールは飲まなかったけど。

聞き手：唄とか踊りを、どのように発展していきたいと思いますか。

K. H：やっぱり若い人って言ったらあれだけど、〇〇（団体）も伝承がきちんとなっていないから、節回しをもうちょっとちゃんとしたいかな。踊りも意味を理解して踊りたいよ。それをみんなで伝承していきたいね。月に2回は集まって練習しているよ。阿寒と比べたらね、足の運び方、屈伸の仕方、優雅さが素晴らしいね。まねできない。鶴の舞一つとっても、あんなに優雅にできない。旭川の鶴の舞は、小鶴が4羽、座っているのが2人立っているのが2人、親鶴が2人…2人なんだけど、今は略式にして小鶴2人に親鶴2人の4人でやってるの。練習量も指揮する人も、両方で差が生まれてしまっているね。阿寒のマリモ祭とか見に行くけど、どうしてこんなに斜めなコタンでできるかなって、よく転ばないなって思う。でも、将来はあれぐらいまでになりたい。白老の象徴空間のこけら落とし、阿寒に対抗できる団体に〇〇（団体）もになりたい。

聞き手：自分の日常に、アイヌ文化があると感じる時はありますか？

K. H：やっぱり、突然アイヌ語が出ること。普通に話してるはずなのに「いや～、ひどいねこのレイブン（猛吹雪）」…ってことを…そう言っちゃうの。あと、これは藤村英和先生から教わったことなんだけど、玄関にはアバサンカムイ…っていうのがあるの。私、先生に言われたとおりに信仰してるんだけど、毎月1日に100円で売ってるトノトあるでしょ、それを神様専用置いてあるの。また今月もお金が入ってきますように…って、自分の別な財布を置いておくの。そして出かけるとき「今日は〇〇があるから行ってきます。お力を与えてください」…って言うの。トンネルもヌプリ（山）カムイっていうのがある…トンネルはヌプリカムイのおなかの中を通るんだから必ず「失礼します」って言って通るんだ。そして「お力を与えてください。イヤイライケレ（ありがとう）」…ってちゃんと声をかけて、感謝するの。だってあんな山の中通るんだから、失礼でしょ。

聞き手：周りの方に伝えたい、アイヌ文化以外のことがあれば教えてください。

K. H：北海道にはアイヌがいてアイヌのものなんだから、共同利用館だってピリカコタンだって全部アイヌのものにしてほしい。アイヌが経営して、アイヌが自由に使えるようにしたいってこと。自分は旭川、上川、札幌もそうだし、アイヌだっていえばウタリだと思ってる。関東にいたってアイヌだっていうならウタリだと思う。だから全国組織を作って、権利を返してほしい。アイヌの血が少しでも入ってるなら、

人に恥じることなくアイヌだって言ったらいい。こっちでは2世のことをラタシケ  
ップ（混ぜ物）って呼ぶかもしれないけど、旭川では2世のことをボイサムって  
言うの。差別は双方からあるかもしれないけど、小さいうちからアイヌだって言い  
聞かせていけばアイヌだってことに誇りを持っていくと思う。